

我流子育て支援論 ～ 妊娠をめぐるって～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

一般的に、女性が妊娠したときの気持ちはどうだろうか？うれしいのか、戸惑うのか、困るのか・・・。

もちろん、妊娠した時の状況によるだろう。結婚後の妊娠は喜ぶべきことで、周囲からも祝福される。親になる不安はあるものの、まずは嬉しいと思うのが普通であろう。しかし、未婚の妊娠はどうか？

これは、時代とともに大きく変化してきた。50年くらい前であれば、結婚前の妊娠は「ふしだら」などと言われ、認められにくく、墮胎してしまうことが多かった。結婚するまでは性的関係を持たないのが常識だった時代であるから、当然であろう。

それでも「男女7歳にして席を同じうせず」という時代ではないので、男女が知り合い、付き合うことは比較的自由で、恋愛中は、妊娠しないよう注意していた。もちろんどの時代でも例外はあるが、未婚の妊娠は社会的には「悪いこと」と言うイメージが強かったため、妊娠した瞬間は「困った」と思うのが一般的だっただろう。

その後、日本がどんどん欧米化していくにつれ、恋愛はオープンになり、処女ということが大切に扱われなくなってきた。しかも、テレビが普及し、ドラマがたくさん登場するようになると、その影響も大きく、高校生などの妊娠、出産の話があったり、

「幼な妻」が流行ったりすることで、若年妊娠や未婚の妊娠に対しての歯止めが一気にゆるくなり、何か格好良いことのように捉えられてきた。

その時々で、物事の捉え方、善し悪しの基準と言うのは常に変わっていくものである。そう言えば、「地ベタリアン」という言葉をご承知の方も多いと思うが、電車の中や道端にべったり座っている女子高生を今でも見かけるし、ルーズソックスや腰パンに眉をひそめた方々も沢山いるだろう。不衛生だとか、見た目が悪いとか、年配の方には不評だったと思うが、私も何が良いのかと思ったので、やはり年配に仲間入りしているのかも知れない。

私がこの年代の頃は、ヒッピーが台頭し、男性のロングヘアーにラップズボン、女性の超ミニスカートが流行ったと思ったら、マキシやミディのスカートにコッポリ靴と、その当時の親世代からは、眉をひそめられたファッションだったことを考えると、歴史は繰り返されているようだ。

しかし、電車の中で、化粧をして七変化していく女の子を見るようになって久しいが、恥じらいがないというか、場をわきまえないというか……。近頃では公衆の面前で抱き合ったり、キスしているカップルも見かけるようになった。外国では普通に見られる姿かもしれないが、日本の文化からすると抵抗を感じるのは、やはり私がおばさんだからだろうか？

こうした社会的変化の中で、妊娠に対する感覚が大きく変化してきたのも当然であろう。

ここ 15 年くらいは、妊娠したことが軽いのりに変わり、「できちゃった婚」という言葉が、何のてらいもなく、ファッション

のように使われ始めた。そして、昨今では、セックスは、どんどん低年齢化し、高校のスクールカウンセリングで、生徒たちからセックスの話が出るのは、珍しくなくなった。当然、10代半ばの妊娠も度々見られるようになった。妊娠後の結婚も、最近では「できちゃった婚」ではなく「授かり婚」などといって、妊娠できることがおめでたいと言う捉え方もされるようになった。そこには、不妊の問題もあるだろう。不妊治療をする必要がないことを、正に実証しているのである。

先日、実家から早く出たかったからと言う理由で、結婚を急ぎ、そのために「出来ちゃった婚」を選択したというお母さんに続けて出会った。夫からは、「それじゃあ、誰でも良かったのか」と言われたとか。そういう意味ではないだろうが、このように出来ちゃった婚を、家から出るためのツールとして使ったという話も度々聞く。

母子手帳を取りに来たときに、未入籍が半数近くになっているのも、同棲が、珍しくなくなった現在では、当然の結果なのかもしれない。しかし妊娠することに対して無防備で、親になることの決意もないまま、親になっていくことの問題は大きいと言わざるを得ない。

昔であれば、13歳や15歳で嫁に行き、子どもを産むことが一般的であったので、若年の妊娠が問題だと言うことではない。もちろん、肉体の成熟度は、より安全に子どもを産むためには大切なことだと思うが、それよりも、精神的な成熟度が問題であろう。

ところで、今の子どもたちと昔の子どもたちの精神的な成熟度に違いはあるのだろうか？ 人生 60 年の時代には、15 歳といえ

ば、人生の4分の1まできていることになる。その時代では、高校に行く子どもよりも、中学を出てすぐ働く子ども達の方が圧倒的に多く、家からも離れ、自活していくという意味ではずっと速く、精神的に大人にならざるを得なかっただろう。しかし、人生80年の時代に突入し、誰もが高校に進学していく今の時代では、15歳で自立しなければならない子どもは非常に少ない。少子化の中、国民皆中産階級のような時代背景の影響もあってか、親の庇護の元、好き勝手をしている子どもの方が多いように思う。

人生の終末の成熟を100としたとき、15歳の成熟度を単純計算で求めてみると、人生60年の場合は25、人生80年では約19であり、成熟度が低くてもおかしくない。一般的に最近の子ども達は精神的な育ちが昔に比べて3歳程度遅れているという説もあり、事実その様に感じることも多い。

一方で、親もまた、子どもに密着し、子離れできずにいるのも、子どもの成熟を遅らせている要因であろう。高校生になっても息子と一緒に寝ることをおかしいと思わない母親も見かけるようになった。時には、自分の子どもを「一生家に置いておく」と言い切る母親もいるくらいである。パラサイト・シングルが普通なのかと思うことさえある。親も、可愛いわが子への愛情で本人の自立の邪魔をしていないだろうか？「少ない給料で一人暮らしは無理」と決め込み、「給料が上がるまで家から通えば良い」と言っている親の何と多いことか。自立心もないまま、親になることは、当然経済的にも精神的にも、問題を多く生むことになるだろう。子どもとその親、更にその

上の世代などを巻き込んで様々な問題を引き起こすことになるのだが、妊娠した時点でそこまで考えられているかと言うと疑問である。

このように見ていくと、突然の、未婚の妊娠は、昔ほど「困ったこと」では無いようで、妊娠後の選択として、結婚する、墮胎する、一人で生む等があり、出産後の選択も、一人で育てる、夫婦で育てる、祖父母と育てる、祖父母が育てる、里子に出す、施設に入れる等があり、結果的に何とかしている。加えて、母子・父子家庭への支援、ファミリーサポートセンターや保育所など、子育て支援のシステムも整備されてきて、子どもを生んでも何とか生活していける環境が整いつつあり、情報さえあれば、未婚の妊娠・出産はそれほど困ったことではなく、それがまた未婚の妊娠への抵抗感を低くしているとも言えよう。

また、親も、わが子の妊娠に関し昔ほど抵抗感がなく、父母と若い娘とその子が一緒に住んでいる事例を度々見かけるようになった。そこには娘の兄弟がまだ中学生や小学生でいることも珍しくない。小さいうちから、赤ちゃんを見られるようになることは親になることへの意識を育てる上では良いことかもしれないが、未婚で子どもを生むことへの抵抗感は余計に下げることになるだろう。経済的に自立し、自分の子どもを自分の手で、きちんと養育していくという、大人として、保護者としての意識、義務感はともすると薄れがちで、こうした意識の低さが、虐待と言う問題の底流になっていることもあるのではないだろうか。

妊娠はおめでたいことであるが、心から喜べる、周りからも祝福される妊娠であることを今一度考えるべきではなからうか。

同棲しても、避妊をすればよいだけの話である。古いといわれるかもしれないが、妊娠は、やはり、入籍後に夫婦で良く話し合ってから迎えるべき事柄ではないかと思う。

さて、未婚にしる既婚にしる、妊婦への支援に関し、我々支援者としての対処に大差はないだろう。

どういう形であれ、妊娠したことを共に喜び、親となる日までの過ごし方や物理的・心理的準備を支援していくことになる。時には、妊婦の親や夫あるいはパートナーと出産後の対応について話すことも必要だし、特に妊婦に精神疾患や人格障害などの問題がある場合は、常に気かけながら、支援を継続しなければならず、ともするとバーンアウトに結びつきかねない。しかも妊婦自身の発達障害や人格障害、精神障害は増加傾向にある。中には心理的外傷体験を持ち、自己基盤が脆弱で、自分をはじめ他者を信じられず、他者を拒否するような妊婦もいるのである。このような妊婦は、支援にのりづらく、支援者の細かな気遣いや根気強さが必要で、信頼関係を築けることが第一になる。

こうして努力して信頼関係が出来たところで細かいところを確認していくのである。

例えば、犬や猫をたくさん飼っている家庭では、赤ちゃんをどこに寝かせるか、犬や猫に引っかけられたり、噛み付かれたりしないか、毛の問題はないか、などについても確認していかねばならない。そこには、動物は部屋中を駆けずり回っているが、ずっとベビーベッドに寝かされていて、這い這いすらさせてもらえない赤ちゃんや、犬猫と同じ扱いを受けている赤ちゃんが居るといった事実に出会ってきたからこそその懸念がある。

タバコを吸う家庭であれば、灰皿はどこに置かれるのか、赤ちゃんの居ないところで吸うことはできないかなども確認する必要がある。もちろんそれは紫煙の影響やタバコを食べてしまうという事故を知っているからである。

母親としての意識が低いと、先日の二児の虐待死のように、こどもを置いて出かけ、帰ってこないなどということもある。もちろん虐待になるのだが、そういう母親になりかねない妊婦の把握が支援者の仕事になっている。

妊娠が分かって、母子手帳を取りに来た時点から、支援者（主に保健師）の支援が始まるが、まずそこで保健師の眼力、観察力が問われる。情報をどれだけ取れるか、原家族のことなどについても、心配なケースでは出来るだけ情報を取ることが求められる。出産までの、母親教室の活用やその折の対人関係や、定期健診の受診などがきちんとできているかなども把握しながら、この妊婦が母親としての意識を育てているか確認している。もちろん、父親教室などでも父親の確認もしなければならない。

また、地域の医療機関等との連携がうまく出来ていると、個人情報保護法の壁はあるものの、早くから妊婦の支援を開始できる。保健所や保健センターは発達障害や精神障害の診断を受けている妊婦はもちろん、診断を受けていなくても気になる妊婦の情報を医療機関と共有することが出来ると、妊娠中だけでなく出産後の母親の精神状態や育児状況に注意を向けることが出来、虐待予防につながるだろう。

初めての妊娠出産は誰にとっても一大イベントであり、生死に関わるストレスフルな状況であることは周知の事実であるし、

精神状態が不安定になりやすいことも知られているのに、医療機関や保健福祉等、地域のチームでのケアになっていないとしたら、それは問題と言わざるを得ない。個人情報保護法も、認識の低い妊婦への支援においては、「目の上のたんこぶ」になってはいないだろうか。虐待予防のためには、もっと積極的な支援が必要と思っている。

一方で最近危惧していることがある。人間は本来動物であり、子を産み育てることが出来るよう、遺伝子の中に組み込まれているはずである。しかし最近感じるのはそうした情報が欠落しているのではないかということだ。

社会では、セックスレスの夫婦、同性愛、男性精子の減少と生殖能力の減退、出生数の低下、不妊治療の増加など、人類の存続に関わる問題が増えている。更に環境の悪化は、アレルギー患者の増加、免疫力の低下、より強いウイルス、病原菌の発生など様々な弊害を生んでいる。豊かな物質と情報に囲まれながら、一方で動物的本能を失いつつある人類に未来はあるのかと心配になってしまいが、こうした社会環境、情勢の下、母親として育ちきれない人が増えた。

どのようにして、妊婦に母親になることの意識や楽しさ、大変さを伝え、母親として、子を思う気持ちを育てればよいのか。

昨今さまざまなプログラムが出来ており、私も講義をすることが増えたが、母親モデルが自分の親兄弟等、生身の人間ではなく、ネット情報や育児書になってきており、そうした情報に振り回されている母親たちの現状に戸惑いを感じている。今後、もっと参加しやすい研修の場や、生身のモデルと接する機会を増やさねばならないのだろう。しかし一方で、母親として育つときに

は、妊婦の原家族における母子関係が影響していることが多いが、そこに手をつけるには妊娠してからでは遅すぎる。もっともっと早い時期に何らかの手を打たなければならない。いつどこで、どのような手を打てば、この問題が解決されるのか、考えてみたいが、その前に次章で乳幼児の子育て支援について考えてみようと思う。



